

---

# 魔法が使えたら

ゆか莉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法が使えたら

### 【Nコード】

N4472C

### 【作者名】

ゆかり

### 【あらすじ】

魔法使いと小学生。魔法がつかえたらなんて考えたこと誰でも一度はあるはずですよ！そんな願いから出発した作品。連載。

## 魔法使い（前書き）

私的な事情で、連載は少しずつ、不定期になってしまいかもしれません。でも頑張るので、できればお付き合いください！！

## 魔法使い

魔法使いは小さな農村で母親と暮らしていました。小高い山に囲まれたこの小さな農村は、人口も少なく、緑が多くてのんびりとした所でした。村の人々は、この農村で作った作物を街まで売りに行っていました。それが、それ以外の機会に街へ行くことはほとんどなく、都会との接点もありませんでした。

魔法使いがこの農村に住むには理由がありました。彼の母親は体が弱く、ベッドから起き上がることもままならない状態でした。彼は母親のことを考えて、空気の汚い都会からこの緑の多い農村へ越してきたのでした。また、この時代は魔法使いは悪魔と考えられている時代でした。彼は過去に捕らえられて処刑された仲間たちを何人も見てきました。都会から越してきたのは、その厳しい監視の目から逃れるためでもありました。都会との接点の薄いこの農村であれば、見つかる心配も少ないと考えたのです。

とは言っても、農村で生きていくためには農業をする必要があります。魔法使いは小さな畑を借り受けて、農業をはじめました。魔法使いとは言っても、見た目は普通の人間です。この魔法使いはまだ20歳で体力も十分にありました。農村の人々も彼のことをごく普通の青年だと思っていました。しかし、彼にはどうも農業というのはなじみませんでした。彼と母親の二人が生活できるだけの作物を作ればよかったです。彼の労働量はさほどではありませんでしたが、魔法が使える彼にとって肉体労働はくだらないことには感じられたのでした。

ある夜、魔法使いはまだ何も植えられていない畑に杖をもって出かけました。魔法使いはあたりを見回して、誰もいないことを確認すると杖を振りました。杖の先が赤く光って土がひとりで動き始めました。翌朝にもなかつたその土地は、立派なトマト畑になっていました。

### 三人の小学生

三人の小学生が田舎のあぜ道を歩いていた。夏の暑い日だった。空には雲一つなく、真っ青な空がどこまでも広がっていた。さわやかな風が吹き、どこからか蝉の声が聞こえた。あぜ道の両脇は田んぼになっていて、その向こうには遠くに背の高い山々が見えた。きれいに緑に色づいていた。

歩いている三人のうち二人は男の子だった。先頭を歩くのは女の子で、後ろの二人の男の子には目もくれずに歩いていた。二人の男の子はなぜかびよびよことジャンプしたり、まるで綱渡りでもしているかのようにバランスを取りながら歩いたりしていた。それが先頭の女の子におくれをとっている最大の原因だった。どうやらこの男の子二人、コウタとヒロシは影だけを踏んで家まで帰るというゲームに興じているようだった。さつきから、電柱や電線の細い影をなんとか伝って歩いていたのだ。それを先頭を歩くユウコは馬鹿らしいと感じているらしく、見向きもせず歩いていた。それをコウタもヒロシも気にしている様子はなかったが、不思議なことにこの二人とユウコの距離は一定の幅を保ったまま変わることにはなかった。あぜ道は、コンクリートで舗装された道路に突き当たった。そこは丁字路のようになっていて、道路の向こうには川が流れていた。川は、道路のはるか下を流れていたため、垂直に近い土手が作られ、ガードレールが設けられていた。ユウコはそのガードレールに手をつけて下をのぞきこんでいた。川まではなかなかの高さがあるので、少し怖いくらいだった。川辺にはごつごつとした石が敷き詰められていた。その先で、石を川に投げ込む人影が見えた。タカシだった。

## タカシと三人の小学生

タカシは足もとの石を拾っては投げ、また新しい石を探してはそれを投げていた。石が川に落ちる空しい音と、川の流れるかすかな音がなんとも涼しげだった。しかし、現在のタカシの事情をよく知る者には、これらの音はきつと悲しげに聞こえただろう。現にガードレールに手をつけてこの光景を見ていた三人は、あたり一面に散りばめられていた悲しさの要素一つ一つを敏感に感じとっていた。それは三人にとっても悲しすぎるものであり、到底耐えられるものではなかった。

「おい、タカシ！」

あたり一面の悲しい空気を吹き飛ばすためか、コウタが大声で叫んだ。すると一瞬にして空気は凍りついた。タカシは石を持ったまま三人を振り返った。冷たい表情。タカシは足元のランドセルをひつつかむと、そのまま走り去ってしまった。三人はそれを茫然と見つめていた。あたりはまた川の流れる静かな音に包まれた。悲しみの要素はやはりタカシから発せられていたらしい。彼の去ったあとの河原はまた涼しげな雰囲気を取り戻しつつあった。

「逃げちゃたね。」ヒロシが言った。

二人は返事をしなかった。ただ河原を見つめていた。涼しさを取り戻したのは河原だけだった。ガードレールのそばにはまだ消えない悲しさが渦巻いていた。

三人とタカシは以前はとても仲が良かった。もとはと言えば、先ほどまでコウタとヒロシがしていた影だけを踏んで家まで帰るというゲームも、タカシが考え出したものだった。以前は4人で登下校もしていたのだ。タカシは4人のリーダーのような存在で、信頼も

集めていた。登校するときの集合場所に一番先に来ているのは毎朝タカシだったし、それはお決まりのように遅刻してくるコウタとはあまりにも対照的で、いつもコウタを叱っていたユウコの目にもとても好意的に映っていた。タカシは授業でもよく発言していたし、成績も優秀だった。ヒロシも学業に関してはタカシには負けていなかったが、いつもマイペースな彼は何を考えているのかよくわからないところがあった。それがヒロシにとってはタカシのような信頼を勝ち取るには大きな大きな障害となっていた。

去年の夏には4人でこの川で遊んだこともあった。去年の夏も今年の夏に負けず劣らず暑い夏だった。タカシ、コウタ、ヒロシは競争に興じていた。そんなときユウコは河原でスターターをとめていた。彼らは飽きることなく何時間も泳いだ。結果はタカシが僅差でコウタに勝利した。コウタはひどく悔しがって、競争が終わった後も、タカシに勝ためのフォームを模索していた。一方ヒロシは大きな差で敗れた三戦目以降、川原で力二を眺めていた。「もう疲れた。」小さな声で呟くのがユウコに聞こえた。

四人は近所の畑で遊んだりもしたし、学校の同級生たちを集めて学校の校庭で遊ぶこともあった。しかしどんなときにも、帰り道には夕焼け空の下長く延びる影だけを踏んで帰った。ユウコは決まらずに参加しなかったが、先を歩くユウコと後ろでびよんぴよん跳ねながら進む三人との距離は決まって一定だった。4人はいつも一緒だった。

しかし、タカシにある事件が起きて以降、状況は一変してしまった。

## タカシと母親

タカシは母親ととても仲がよかった。タカシの家はこの地域の例に漏れず畑を所有していて、タカシは母親の農作業の手伝いをよくしていた。タカシの母親も、タカシのことを優秀な子供と認めていたらしく、あまり彼を叱ることはなかったという。

畑で作ったスイカなどは夏に収穫して食べていた。ユウコ、コウタ、ヒロシの三人も度々タカシの家に招かれて、スイカを一緒に食べていた。その時タカシはその冬の家族旅行の計画を自慢げに話した。家族でスキーへ行くのだと言う。タカシの父親は単身赴任をしていて、普段は都会で生活しているが、この旅行では長い間一緒にいられると言ってタカシは喜んでいた。もちろん父親がこの田舎に帰ってくることもあったが、それは月に一度、週末に限ったことだった。

タカシは一人っ子だったし、父親が普段家にいないこともあって自然と母親との時間が多くなった。タカシは学校の自慢なども母親によくしていた。テストで良い点をとったことや、先生にほめられたことなど、どんな些細なことでも母親に満面の笑みで報告した。タカシの母親も笑顔でそれに応え、タカシのことを誉めていた。

そんなタカシの母親が入院したのはその秋のことだった。突然のように体調を崩したタカシの母親は、となり町の病院に入院してしまっただのである。この町には大きな病院がなく、となり町で入院するほかなかったのだ。そのためタカシもお見舞いをするため毎日のようにバスに乗ってとなり町まで出かけて行くようになった。タカシの母親はタカシが心配そうに病室に来るたびに、「大丈夫よ。」と笑顔で言っていた。タカシにはその言葉が何よりもうれしかった。しかし、母親の病状は言葉とは裏腹に悪くなる一方だった。それまでは学校でもいつもどおりに振舞っていたタカシだったが、冬こ



るになるとそれもできなくなっていた。いつもどおり明るくしているつもりなのだろうが、三人にはそれが偽りであることが容易に見抜けた。そしていつの間にかタカシは朝に待ち合わせ場所に姿を見せなくなり、学校に遅刻してることが多くなった。授業で発言することはもちろん、友達との会話も減り、ついにはしゃべらなくなつた。三人とて例外ではなく、どんなに話しかけようと無視されるようになった。タカシはまるで魂の抜けた人形のようになつてしまつていた。それは人を無視をしているというよりは、彼には誰も見えていないのではないかと感じさせるほつどだつた。帰り道にタカシが影をたどることはなくなり、三人とタカシはいつも別々に歸つた。その冬は三人にとつてはとても寒い冬となつた。気温以外の作用が彼らを襲つていたのである。

タカシ母親はこの春に亡くなつた。三人はその通夜にも参加したが、その時のタカシの様子には以前の活発だつた面影はなかつた。タカシは無限に溢れる涙をハンカチでぬぐい続けていた。三人にとつては初めて見るタカシの涙だつた。

それから現在に至るまで、タカシの体に魂は歸つてきていない。コウタが呼びかけてもタカシが逃げて行つたのにはこのような経緯があつたのである。

## タカシの家

三人はガードレールに手をついたまま、しばらく川を眺めていた。四人で遊んだ時のことが思い出されて寂しい気持ちがあった。もう以前のようなタカシに会うことはできないのか、そんな疑問が三人の頭上でくるくると旋回していた。

「なあ、一度タカシの家へ行ってみないか。」

そう切り出したのはコウタだった。コウタはどうしても疑問の答えを出したかったのだ。

「でも行ってもしょうがないんじゃない？ どうせ口をきいてくれなだけでよ。」

ユウコは言った。川の魚がはねて、また着水するときの音が聞こえた。

「ヒロシはどう思う？」

コウタがきいた。

「わかんない。どっちでもいい。」

ヒロシは川をぼんやりと眺めたまま言った。「わからない」というのはヒロシの口癖だった。

「いいから一度行ってみよう。俺このままじゃ納得いかないよ。また四人で遊びたいんだ。」

結局三人はタカシの家へ向かうことにした。最終的にユウコが折れる形でコウタに同意したのだ。ヒロシは何も言わず、二人の後ろをついてきた。下を向いたまま、また影を探しているようだった。

タカシの家は木造の一戸建てで、なかなかの歴史を感じさせる建物だった。家屋の隣には、迫力のあるこれまた木造の大きな蔵があった。家には縁側があるのだが、よくみんなでスイカを食べた思い出のこの場所も、今はなぜか寂しく見えた。

タカシは現在父親と二人で暮らしている。タカシの父親は長時間の通勤時間もかえりみず、現在は家から会社まで通勤しているのだ。

しかし、どうしても仕事が残ってしまふときは会社で寝泊まりし、タカシが家に一人になることも多かった。

タカシの家の裏手は山になっていて、そこからはうるさいほどにセミの鳴き声が聞こえてきた。去年の夏にスイカを食べにここへ来た時にはさほど気にならなかったのだが、今はそうはいかなかった。甲高い鳴き声が幾重にも重なり合って重厚な不協和音をあたりにまき散らしていた。また、三人の感覚では、山は去年のほうが綺麗な緑色に染まっていたような気がした。今年の山は緑は緑なのだが、色が暗く、どこかじめじめとした印象だった。去年のような、爽やかな緑色の夏の山は、今年はどこかへ行ってしまったらしい。

タカシの家からは、人の住んでいる気配がほとんど感じられなかった。それはべつに家が古いからとか、そういった理由によるものではなかった。この家全体が発する重苦しい空気が、このあたり一帯の時空を取り仕切っていたのである。ここへくると視覚も聴覚も、その他さまざまな感覚も、狂った方位磁石のようにくるくると回りだして、ついにはコントロールがきかなくなる。そして最終的にはすべてがこの家の雰囲気のみこまれていってしまうのだった。

三人はタカシの家のドアの前に立った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4472c/>

---

魔法が使えたら

2010年10月28日08時15分発行